

長男は、消防士で後輩の2人と3人で当直に当たっていました。長男は、避難命令を放送。数秒先に退避した2人の消防士の方が亡くなり、長男のみ助かりました。そのショックで津波のことは、一切話しません。マスコミのインタビューは、絶対受けません。5日後に、次男が生きているのが分かりました。町が、避難指定した場所で避難した人々が、何十人も亡くなりました。

第2部 ボランティア活動

私は、生かされた命を大切に活かそうと思い、大槌町でボランティアをする決意をしました。

被災された中年女性が、避難所で「誰かに連れていかれるような気がする」という被害妄想に陥っていました。

私は、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が頭をよぎります。この詩は、「共に生きる」ことを謳っています。3・11を体験して、初めて内容を少し理解できました。

私は、伝承館に避難しました。3・17に多田一彦さんが、避難所にやってきました。多田さんとは、面識があり、それが、遠野まごころネットの接点です。自衛隊からも、多田さんからも救援物資が届きました。物資を頂いた事は勿論嬉しかったのですが、多くの人々が声を掛けて下さったことがありがたかったです。

3・11で全てを無くしました。被災後の3日目に3人で1個のおにぎりを分け合って食べた事が「生きる」ことの大切さを教えてくれました。

初め、大槌町民は瓦礫回収のボランティアを受け入れませんでした。その理由は、「なぜ、自分の家の敷地に他人が入って手をつけるのか」

と言われ、理解してもらえませんでした。そこで、知人のWさんに「騙されたと思ってボランティアにやらせてもらえないか」と頼みました。Wさんは、「しかたない。やってもらおう」と言われ、初めてボランティアが、大槌町桜木町地区に入りました。30人、40人と遠野まごころネットのボランティアが入って家屋の瓦礫回収をおこないました。その活動ぶり、活動後の結果を見て、「うちもやってくれないか」とニーズが次々と入るようになり、さらには、「なんで、うちの家には来てくれないのか」という状況にまでなって行きました。桜木町における遠野まごころネットの活動の結果が「遠野まごころネット」を地域の人々が受け入れて下さる出発点になり、期待されるようになって行きました。

避難所で苦しんでいる人々を見て、被災者の交流場所が必要だと考えました。このため、「遠野まごころネット」の当時の副代表であった多田一彦さんの協力の下、民有地を借りて2011.4.29から膝まで草茫々の所の草刈りをし、杭を打って、5・2に「まごころ広場」が開設されました。被災後、弓道場は、避難所となり、野球場は、自衛隊基地になり、倉庫も設置されました。「まごころ広場」には、足湯隊が来られ、バザーを実施、理美容室も開かれ、物資配布も行われました。芸能関係の方々も来て下さいました。

被災者の人々は、心を閉ざし、口数少なく、ただ食べるだけ、物資を持っていくだけ、といった状態の人々だったのが、5・2から3週間後のある日10人位の被災者が来られました。

「お世話になっているだけでは、心苦しい。何か手伝わせてほしい。」この方々を通じて、輪が広がり、交流の場になっていきました。被災された方々とボランティアの交流する場になって